

新大学への環境移行に関する心理学的研究 —環境認知と愛着感の大学への適応との関連から—

A Psychological Study on Environmental Transition to a New University : Effects of Environmental Cognition and Attachment on Adjusting to the University

亀岡 聖朗

要 約

本研究は、学生の所属大学への愛着感に焦点をあて、大学生活をどう捉えているのかという認知次元との関連を、大学1年生380名を対象として調査した。大学生活の認知次元を明らかにするために因子分析を実施したところ、“実践”因子、“自由度”因子、“主体性”因子、“不安”因子、“交友”因子の5因子を抽出した。さらに、大学への愛着感を独立変数、各認知次元を従属変数とする重回帰分析を実施し、愛着感に関連する認知次元を明らかにしたところ、有意な因子として“不安”因子以外の4因子が選出された。これらの結果から、大学に対する愛着感是新入生の大学生活に影響を与え、なおかつ環境への適応にも関連することが示唆された。

キーワード：大学環境、愛着感、環境移行、適応

はじめに

環境移行

人は、自ら意識するしないにかかわらず、周囲を取り巻く環境と影響しあいながら活動している。ここでいう環境とは、建築物のような物理的環境のみならず、個人を取り巻く他者との関係を含む対人的環境、社会を形作る法や制度などの社会的環境をも含むが、人の発達を考えたとき、人生を過ごしていく上でたびたびこれまで慣れ親しんだ環境から新たな環境へと移行変わることを経験する。人生の出来事や移動によってこれらの環境が変わること、およびそこに生じる状態のことを環境移行^{1,2)}という。環境移行は、人の生涯発達を通じて迎える、進学、就職、結婚、子育て、配偶者の死などさまざまなライフ・イベントで生じ、人はその時々で新たな環境へと適応していくことが求められる。積極的に適応していくようなときもあれば、環境の変化に対応しきれない場合には強いストレスにさらされるときもある。

このような適応上の問題は、心理学では臨床心理学的な立場で捉えられることが多い。すなわち、新環境への適応不全が引き起こす個人のさまざまな不

適応の症例を取り上げ、その問題に対してどのような心理的援助が必要であるか、ということに注目するのである。

一方で、その人の周囲を取り巻く具体的な環境とのかかわりをも含め、人と環境とを一つの系とみなし、そこで生じる問題を巨視的に捉えようとする立場がある。この場合、適応（ないしは不適応）に影響を与える環境の要因は何であるか、という立場で捉えることになる。したがって、適応不全に対する心理的援助の方略を検討することよりは、どちらかといえば、人が環境をどう評価し環境が人にどのような影響を及ぼすものなのかを明らかにすることに主眼が置かれる。

これら2つの視点は相対するものではなく、それぞれを補完するものであるが、本研究ではとくに後者の視点に重点を置くものとする。

大学環境への移行と適応の問題

高等学校などから大学への進学は、個人の役割や生活する地域社会が変化することのある、環境移行の一種として捉えることができる。

昨今の大学進学の実情は、大部分の学生にとって、将来の生活設計への道を拓くパスポートを得ること

が第一義にあり、その上で多少の教養を身につけ、かつ、大学生生活を楽しむ³⁾という指摘があり、明確な目的意識を持たないまま入学した学生、あるいは大学生生活の中で目的意識を獲得できない学生の中には、適応することがかなわず、無気力・無関心に陥るものも現れる。

では大学環境への適応はいかなる要因によって影響されるのであろうか。適応とは個人と環境の関係を示す概念であり、個人と環境の調和・一致⁴⁾であるといえるが、その要因は、進学前の要因と進学後の要因とに大別できると考えられる。

例えば前者については、古くは柳井⁵⁾が進学動機と大学での適応の関連を検討している。それによれば、自らの適性を踏まえながら自分の専門を選択した学生と、親のすすめなど他律的な要因で自分の専門を選択した学生とでは、前者の学生の方が大学への適応度が高いことを示している。また、淵上⁶⁾は、高校3年生を対象として、大学への進学志望動機の構造を因子分析により検討している。それによれば、高校3年生の大学進学志望動機として、専門知識を深めたい、広く教養を身につけたいという欲求にかかわる“大学の本来的機能”因子、親孝行のため、親のすすめなど親への配慮にかかわる“家族への配慮と規範機能”因子、人生の決定を遅らせようとする欲求にかかわる“モラトリアム機能”因子、大学で多くの人と知り合いたい、クラブ活動に参加したいなどの欲求にかかわる“大学の副次的機能”因子、裕福な生活を送りたい、一流企業に就職したいなどの欲求にかかわる“大学の経済価値機能”因子、という5因子を抽出している。さらに、志望動機と他者からの影響との関連も検討し、生徒が目的意識を持って進学しようと意思決定する際には、父親や教師の影響力が深く関与することを見出している。古澤・山下⁷⁾による女子高校生を対象とした進学動機の因子分析的研究でも、ほぼ同様の因子が得られている。佐藤⁸⁾は、音楽大学に入学した1, 2年生を対象として、進学理由の因子分析結果と進学後の適応について検討している。それによれば、進学理由として、専門的な知識や技術を身につけたいなどという“将来展望”因子、自分の音楽的才能に気づきそれを生かせると思ったという“能力活用”因子、音楽が自分の一部であり支えであるという“同一視”因子、家族や先生のすすめがあったからという“他者のすすめ”因子、音楽以外に得意科目がないなどという“消極的動機”因子の5因子を抽出している。

さらに、前者3因子を積極的動機、後者2因子を消極的動機として、適応とのかかわりを検討し、積極的動機を持って入学した学生はそうでない学生に比べて大学への適応度が高いことを見出している。

これらの研究はいずれも、明確な進学理由や志望動機を持って大学進学する学生は、そうでない学生に比べて大学環境へよりよく適応する傾向があることを示している。

一方、進学後の要因に関する研究では、例えば飯島⁹⁾による検討がある。これは、大学新生を追跡調査し、大学環境への適応過程を進学後のストレスや不安に対するサポート対象との関連から検討したものである。大学入学後の4月を始めとして、6月、9月、12月という4つの時系列で比較検討しているが、女子は男子よりサポート対象を利用して不安の低減を図っていること、大学への適応が進むにつれてサポート対象は入学前の同性や異性の友人から現在の同性や異性の友人、先輩、先生へと移っていくこと、新環境に順化して安定期を迎える12月の時点ではサポート対象が家族へと回帰していくこと、という3点を明らかにしている。また、大久保・青柳¹⁰⁾は、環境における文脈からの要請と調和した形で自己の欲求を充足できる場を「居場所」と定義し、大学環境に居場所を求められるか否かを適応の一側面と位置づけて、大学生個別のインタビューによる質的調査を行っている。それによれば、大学において自らが抱いている欲求を充足できていると感じている学生のほうが、そうでない学生に比べてより適応的な状態にあることを明らかにしている。また、川野¹¹⁾は、短大生を対象として、短大入学時の環境移行の過程について検討している。これは有機体発達論的システム論的アプローチ^{12, 13)}に基づくもので、短大入学時の環境移行について、ゴールデンウィーク明けからほぼ1週間おきに7回にわたって時系列的に気分を調査し、同時に、その気分が何によってもたらされるのかという原因帰属を記述し、それらを手がかりとして移行過程のモデル化を試みている。この検討は、あるひとつの短大の在学学生を対象とした少数事例の質的分析であるため、どの程度の蓋然性をもつかは疑問であるものの、短大への移行過程を、混乱期（気分は良くなく移行に際して混乱が続き新規な環境に焦点化できない時期）、移行作業期（新環境に働きかけることで情緒的な安定を図る時期）、課題期（学生全てに共通する重要な課題に取り組むことが求められ、それが結果として短大への焦点化を

促す時期)の順に移り変わるというモデルを提示している点で興味深い。

これらの研究は、進学後の要因に焦点をあてているが、適応をどのような観点から捉えるのかについては多様なアプローチがあることを示唆している。

これまで見てきたとおり、環境移行に伴う適応の要因は、移行前にしても移行後にしても、さまざまな要因が取り上げられてきているが、その多くは個々人の動機や対人的環境に注目するものであるといえる。それに比べて、移行した具体的な環境自体をどう捉えているのかという観点からの検討は少ない。亀岡^{14, 15)}は、大学環境の評価を目的として、大学生が大学生活をどのように認知しているかについて検討してきたが、本研究ではそれらの検討の延長として、とくに大学という物理的環境への愛着の度合いに注目して、環境への適応の問題を考察する。物理的な環境への愛着は、とくに場所への愛着¹⁶⁾と呼ばれる。愛着(attachment)とは、人の発達初期に乳幼児から母親へ向けられる情愛のことである¹⁷⁾。養育者との愛着の形成が後のその子の社会性発達の基礎をなすと考えられており、発達における適応に影響すると考えられている。場所への愛着(place attachment)とは、この愛着の対象を対人ではなく対場所へと置き換えた概念であり、人間と場所との間の感情的なつながりという定義で多くの研究に用いられるようになってきている¹⁸⁾。本研究における愛着もその意味で使用するが、場所への愛着の研究は、自らが住まい暮らす住区や地域社会を中心に行われてきており、この観点から大学環境を捉えた研究はみられない。そこで、本研究ではまず大学生活の場としての大学への認知次元を捉え、その上で、認知次元と愛着との関連を検討することを目的とし、適応の問題を考察することを試みる。

方 法

調査対象者 東京都区内にある4年制大学に通学する大学1年生380名。対象者の平均年齢は18.53歳、SDは0.67であった。内訳は男子学生353名、女子学生27名であった。

調査方法 東京都近郊の大学の複数学部において集団で質問紙調査により実施した。調査用紙の構成は、大学生活の認知に関する65項目、大学校舎概観の印象に関する13項目、所属大学学部への愛着に関する20項目、日ごろの学生生活の実態に関する10項目、そしてプロフィール項目によって構成した。このう

ち、認知に関する65項目は大学生に対して学生生活をどう思うかという自由記述の内容を参考にして項目化した。大学校舎外観の印象についてはPOE(Post-occupancy Evaluation: 占有後環境評価)に役立てるための評価項目として含めた。愛着に関する項目は近隣地域への愛着感評定尺度¹⁹⁾に基づいて、内容を大学環境への愛着を示すものへ改訂して用いた。これらの項目への評定は、すべて「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの7段階評定とした。なお本研究では、2001年6月から7月にかけて調査したデータから認知に関する項目と愛着に関する項目の関連について言及した。

結果の処理 結果の処理は、大学生活の認知次元の検討、認知次元と愛着感との関連、という2点を明らかにする目的で行った。

まず、大学生活の認知に関する全65項目について、「非常にあてはまる」を7、「まったくあてはまらない」を1というように順に得点化し、対象者から得られた評定値を元に項目分析を行った。項目分析は、1)各項目に対する評定平均値と標準偏差を算出し、平均値±標準偏差の値が評定段階を超えるような天井効果、フロア効果を示す項目を確認する、2)それらの効果が認められなかった項目を対象として反復主因子法による因子分析を行う、という手順で実施した。因子分析では、各項目の共通性の値が低いもの(0.16未満)や因子負荷量(0.40未満の項目、複数の因子に高い負荷量を示す項目は削除対象として検討する)を参考にして、因子ごとに独立性を保つように項目を取捨選択し、不良項目を整理した。そして、残った項目により大学生活の認知次元を抽出するために反復主因子法による因子分析を行った。

次に、大学への愛着感尺度を構成する全20項目(表1)について、反転項目の得点をそろえたのちクロンバックの α 係数を算出し、尺度の内的一貫性を確認した。さらに、愛着感を独立変数、因子分析によって得られた認知次元を従属変数とするフォワードセレクション式のステップワイズ重回帰分析を行い、愛着感に影響する認知次元を選出した。

最後に、愛着感尺度の各項目の合計得点を算出し、合計得点の高い方から上位25%の対象者を上位群、低い方から下位25%の対象者を下位群、その間に該当する対象者を中位群とし、因子分析によって得られた認知次元ごとの因子得点平均値と標準偏差を算出、重回帰分析で選択された認知次元を対象として、愛着感の程度による差異を検討するために、因子得

点平均値を独立変数、愛着感を従属変数とする1要因3水準の分散分析を行った。

表1 愛着感尺度の項目

1	新聞やテレビに自分の通う学部が出ても気にならない※
2	自分の通う学部を悪くいう人は許せない
3	この学部に通っている人が退学して去っていくのは残念だ
4	自分の通う学部を描いた絵や写真があれば取っておく
5	時代とともに学部の周辺の町並みも変わって当たり前だ※
6	私の生活で重要なものは、学部よりも家庭の雰囲気だ※
7	同じ学部に通っていても、知らない人はよそ者同然だ※
8	「同じ学部のよしみで」といわれると断れない
9	卒業してしまえば、再びこの学部に来たいとは思わない※
10	この学部は私の本拠地とはいえない※
11	この学部は生きがいだ
12	この学部は私の体の一部のようなものだ
13	学部全体について考える機会はありません※
14	「私たち」というと、自分とこの学部の人々が頭に浮かんでくる
15	学部の対抗行事で、この学部が負けても気にならない※
16	同じ学部でも用いない場所には興味がない※
17	学部内に有名な人がいても自分とは関係ない※
18	「あなたの学部」といわれてもピンとこない※
19	学部内の景観の急激な変化には耐えられない
20	学部の仲間よりアルバイトの仲間のほうが共感できる人が多い※

※は反転項目

結果

因子分析の結果

大学生活に対する認知を測る65項目を項目分析し、最終的に23項目を分析に用いた。これらの項目に対して因子分析（反復主因子法、バリマックス回転）を行い、因子寄与率、項目のまとまりなどを検討した結果、5因子解を最適解と判断した（表2）。

第1因子は、「授業は高等で実践的だと感じる」、などの項目への負荷量が高く、“実践”因子と命名した。第2因子は、「自由に行動できる時間が多い」などの項目への負荷量が高く、“自由度”因子と命名した。第3因子は、「大学では全てを決めるのは自分であり、自主性が尊重される」などの項目への負荷量が高く、“主体性”因子と命名した。第4因子は「授業の内容が濃くて、ついていくのがつらいと感じる」などの項目への負荷量が高く、“不安”因子と命名した。第5因子は、「大学では気の合う友達ができ楽しい」などの項目への負荷量が高く、“交友”因子と命名した。なお、各因子のクロンバックの α 係数は、0.78、0.77、0.73、0.68、0.75であった。第4因子がやや小さめであるが、概ね各因子の内的一貫性は保たれていると判断された。

表2 因子分析の結果

項目内容	I	II	III	IV	V	t^2
Q19 授業は高等で実用的だと感じる	0.65					0.49
Q9 この学部には、自分が求めていた授業がたくさんある	0.65					0.49
Q57 大学の授業内容は実践的だと感じる	0.64					0.44
Q30 授業では、量より質の学習ができる	0.56					0.40
Q29 大学生活は、毎日やることがあるので疲れるが充実している	0.52					0.40
Q22 学生と先生との精神的な距離は近いと思う	0.46					0.24
Q2 全く知らなかった知識や体験が増えるところだ	0.42					0.31
Q65 自由に行動できる時間が多い		0.78				0.64
Q35 大学での生活は、ゆとりがあってとても楽である		0.73				0.57
Q64 授業の時間割にゆとりがある		0.60				0.38
Q18 大学の生活は、自由で束縛されないことが多い		0.47				0.36
Q11 大学はレジャーランドに例えられるがその通りだ		0.46				0.23
Q12 自分なりの時間の作り方、使い方ができるようになっている		0.43				0.24
Q20 大学では全てを決めるのは自分であり、自主性が尊重される			0.66			0.52
Q28 全て自分の責任でやらなければならない			0.63			0.46
Q51 大学生活は、自由だが自己管理することが求められる			0.59			0.39
Q58 自分から積極的にならないと損な感じがある			0.48			0.29
Q15 授業の内容が濃くて、ついていくのがつらいと感じる				0.84		0.79
Q7 授業の進度が速くて、ついていけるかどうか不安になる時がある				0.77		0.67
Q34 ときどき自分の本来の目標を見失いがちになることがある					0.76	0.62
Q53 大学では気の合う友達ができ楽しい					0.67	0.53
Q14 自分の交友関係を広めることができる					0.59	0.38
Q24 思っていた以上にすんなり友人が作れると感じる						0.59
説明分散	2.52	2.39	1.87	1.63	1.61	10.03

※因子負荷量0.40未満の値は省略

抽出因子と愛着感との関連～重回帰分析の結果

愛着感尺度のクロンバックの α 係数は0.82を示し、尺度の内的一貫性は保たれていると判断された。そこで、愛着感尺度に影響する認知次元を検討するために、愛着感を独立変数、抽出された5因子を従属変数とするステップワイズ重回帰分析を行ったところ、有意水準1%で第1因子の“実践”因子、第5因子の“交友”因子、第2因子の“自由度”因子、さらに有意傾向を示す因子として第3因子の“主体性”因子を選出した（表3）。

表3 重回帰分析の結果

Step	変数	回帰係数	説明率	F
1	“実践”因子	0.26	0.11	47.75 **
2	“交友”因子	0.23	0.08	36.20 **
3	“自由度”因子	0.10	0.02	6.99 **
4	“主体性”因子	0.07	0.01	3.40 +

+ $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

選出因子と愛着感との関連～分散分析の結果

重回帰分析により選出した各因子の因子得点と大学への愛着感との関連を細かく検討するために、各認知次元を独立変数、愛着感3群（上位群98名、中位群180名、下位群93名）を従属変数とする分散分析を行った。その結果、第1因子の“実践”因子（ $F(2,368) = 27.37, p < .01$ ）、第2因子の“自由度”因子（ $F(2,368) = 4.08, p < .05$ ）、第3因子の“主体性”因子（ $F(2,368) = 6.36, p < .01$ ）、第5因子の“交友”因子（ $F(2,368) = 17.54, p < .01$ ）において群間で有意差が認められた。

これらの有意差が認められた因子についてTukey法による多重比較（ $\alpha = .05$ ）を行ったところ、第1因子では上位群と下位群、中位群と下位群の間で有意差が認められた（図1）。第2因子では上位群と下位群の間でのみ有意差が認められた（図2）。第3因子で上位群と下位群、中位群と下位群の間で有意差が認めら

れた(図3)。第5因子では、上位群と下位群、上位群と中位群、中位群と下位群の全ての群間で有意差が認められた(図4)。

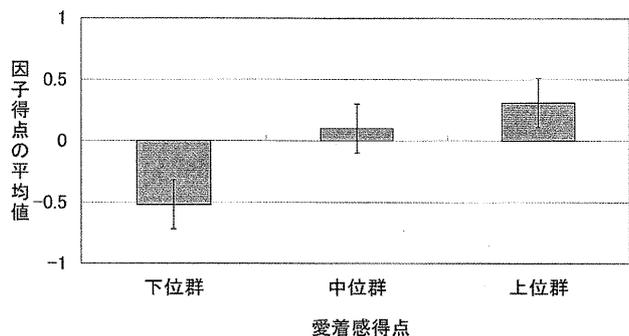


図1 “実践”因子の愛着感得点による比較

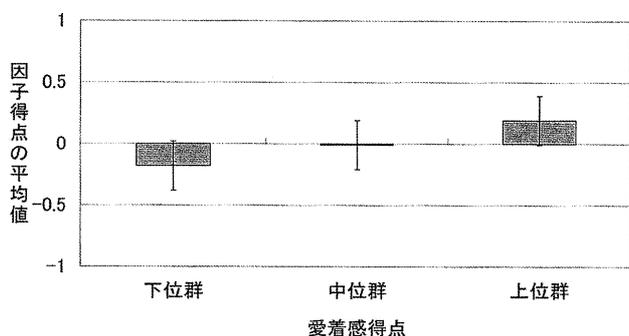


図2 “自由度”因子の愛着感得点による比較

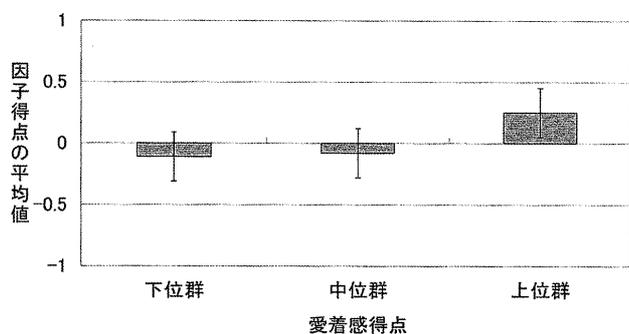


図3 “主体性”因子の愛着感得点による比較

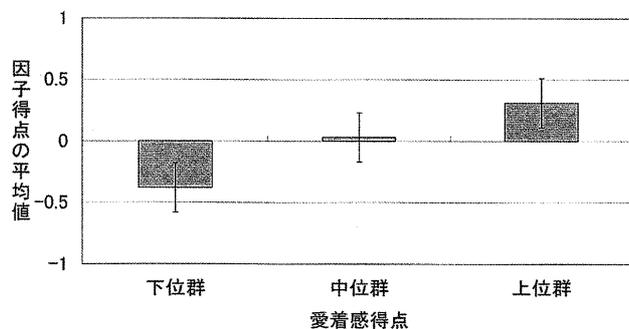


図4 “交友”因子の愛着感得点による比較

考察

因子分析による検討

因子分析の結果，“実践”因子，“自由度”因子，

“主体性”因子，“不安”因子，“交友”因子の5因子を抽出した。

“実践”因子は、大学で学ぶことはこれまでの教育課程で学んできたことより高度な知識や技術を身につけることができる、という大学教育とくに授業に対する期待にかかわる因子であると考えられる。白石²⁰⁾によれば、大学新入生は初めて出会う大学の授業によって、大学の授業に対する第一印象が形成されるとしている。また、大学の授業の評価に対しては、自らの持つ主観的な期待水準に照らし合わせて評価し、その評価は比較的早期に決まる傾向にあることを報告している。その期待は過剰なものである可能性はあるものの、この因子が大学生活の重要な一側面を担うものであることは推察できる。

“自由度”因子は、項目の内容を見る限りは、自由やゆとりもしくは開放的な雰囲気を表す因子であるように捉えられる。しかしながら、所属大学・学部が人文社会系か理工系かによりその自由度の認知は変わると考えられる。経験的に、人文社会系学部より理工系学部のほうが課題やレポートが多く課され時間的な自由さはあまり感じられないという声も聞く。この因子にまとまった項目の評定平均値を人文社会系学部と理工系学部とに分けて表4に記した。各系列学部の対象者数が大幅に異なるので、単純比較はできないものの、理工系学部在籍者(N=324)よりも人文社会系学部在籍者(N=56)のほうが大学生活に自由を感じていることがうかがえる。この因子の意味を解釈する際には、大学進学が必ずしも自由が増えるということをあらわすものではない、むしろ入学前に予想した以上に束縛されるからこそ自由やゆとりに言及する、という側面があるのではないかとすることを考慮する必要がある。

“主体性”因子は、自らの行動を主体的に選択しその選択に責任を負うことを求められる、ということの意味する。入学後の行動の自由度が増すにせよ減じるにせよ、大学生になるということは、年齢的にも成人に近づくことになり、社会的な責任もこれまでよりも増大する。“主体性”因子が抽出されたということは、自分の行動に対する自覚の芽生えに伴う環境への積極的関与を表すものと考えられる。

“不安”因子にまとまった項目は、主に講義に対する不安を示すものである。他の因子と比べるとそのまとまりや内的一貫性は弱いですが、この因子は進学後の大学生が感じる実感の一側面を捉えるものと考えられる。

“交友”因子は、大学における対人関係、とりわけ友人関係にかかわる因子である。古川ら²¹⁾は、入学後1ヶ月すなわち5月中旬という時期までに新たな環境における友人関係を形成することが移行に伴う危機を回避するために重要であることを指摘している。友人関係は大学の副次的な機能であるが、学生が大学環境に馴染むためにはきわめて重要な要因となりうることが示唆される。

表4 “自由度”因子にまつた項目の評定平均値の学部間比較

項目内容	人文社会系	理工系	差
Q11 大学はレジャーランドに例えられるがその通りだ	3.84	2.71	1.13
Q12 自分なりの時間の作り方、使い方ができるようになっている	4.30	3.99	0.31
Q18 大学の生活は、自由で束縛されないことが多い	4.73	4.28	0.45
Q35 大学での生活は、ゆとりがあつてとても楽である	4.13	3.25	0.88
Q64 授業の時間割にゆとりがある	3.98	3.10	0.88
Q65 自由に行動できる時間が多い	4.46	3.52	0.94
平均値	4.24	3.48	0.77

大学生生活の認知次元と愛着感との関連

重回帰分析の結果、大学への愛着感は“実践”因子、“交友”因子、“自由度”因子、“主体性”因子という認知次元との関連が認められた。回帰係数はそれぞれ、0.26, 0.23, 0.10, 0.07で、符号はいずれも+であった。これは、大学への愛着を喚起するには、実践的教育環境、大学における交友関係、活動の自由度、さらには、環境に対する積極的関与を考慮すべきであるということを示したことになる。つまり、これらを高めるほど大学に対する愛着が高まるということになる。また、分散分析では、選出された4因子はいずれも、愛着感得点が高い上位群の方が下位群の因子得点平均値を有意に上回った。これは、いずれの因子においても、大学への愛着が高い群のほうが低い群よりも各因子の内容を強く認知していることを示し、重回帰分析の考察を裏付けるものである。

では、大学環境への愛着が高まるのが移行後の適応状態に影響を与えるものなのであろうか。対象への愛着と適応との関連を論じた文献は多いが、例えば丹羽²²⁾は、高校から大学への移行期にある青年の親への愛着が、移行に伴う新環境への適応過程に及ぼす影響について検討している。そこでは親への愛着を強く感じている群がそうでない群よりもストレス状況における孤独感や対人関係不安を感じない傾向を明らかにし、適応への影響に言及している。これは場所への愛着ではないが、一般的に愛着の対象となるものが身近にあると感じられることが新環境への適応に影響を及ぼすものと考えられる。一方で、場所への愛着と適応との関連については、園田¹⁸⁾が場所への愛着の基本的な効果として心地よさや安

心感が育まれることを指摘している程度で、直接にその関連を扱った文献は見当たらない。加藤ら²³⁾は、個人が自己をよい適応の状態にあると意識しており、生活における安心感、充実感、生きがい感を感じていることを適応感と呼んでおり、その定義によれば、場所への愛着はその環境への適応に影響を及ぼすものであることが予測される。ただ、本研究も大学環境への愛着と適応との関係を直接扱ったものではないため、上述の予測を検討するには、さらにデータを蓄積し、適応にかかわる尺度などとの関連性を検討する必要がある。各学年の縦断的变化を比較する必要もあろう。これらは、今後の課題としたい。

引用文献

- 1) 高橋鷹志：環境移行からみた人間・環境系研究の枠組み。日本建築学会大会学術講演梗概集東北大会：603-604, 1991.
- 2) 山本多喜司・S・ワップナー：人生移行の発達心理学。北大路書房, 1991.
- 3) 小嶋明子：高校から大学へー就職・進学への移行ー, 金沢勲・石川悦子・小嶋明子(編著) 移行期の心理学～こころと社会のライフ・イベント。ブレーン出版, 1998.
- 4) 戸川行男：適応と欲求。金子書房, 1956.
- 5) 柳井晴夫：進路選択と適性。日本経済新聞社, 1975.
- 6) 湖上克義：進学志望の意思決定過程に関する研究。教育心理学研究, 32:59-63, 1984.
- 7) 古澤照幸・山下利之：女子高校生の進路志望動機と進路決定。社会心理学研究, 8:98-106, 1993.
- 8) 佐藤典子：音楽大学への進学理由の認知と進学後の適応について。教育心理学研究, 49:175-185, 2001.
- 9) 飯島婦佐子・川口祐貴子・伊藤彩：大学新入生の適応に関する追跡的研究。性格心理学研究, 3(1):37-50, 1995.
- 10) 大久保智生・青柳肇：新環境移行における大学生の適応過程の質的研究。第10回日本性格心理学学会大会発表論文集:134-135, 2001.
- 11) 川野健治・佐藤達哉・友田貴子：短大入学時の環境移行：気分の原因帰属を手がかりとしたモデル構築の試み, 発達心理学研究, 9(1):12-24, 1998.
- 12) Wapner,S.: Transactions of persons-in-environments:

- Some critical transitions. *Journal of Environmental Psychology*, 1 : 223-239, 1981.
- 13) Wapner, S.: A holistic, developmental, systems-oriented environmental psychology: Some beginnings. In Stokols, D. & Altman, I. (Eds.) *Handbook of Environmental psychology*. New York: Wiley. 1987.
- 14) 亀岡聖朗：学校環境の評価に関する環境心理学的研究－大学環境の認知構造に関する検討－. *人間・環境学会誌*, 13, 7 (1) : 57, 2002.
- 15) 亀岡聖朗：大学への愛着と大学生活に対する認知次元との関連の検討－学校環境への適応に関する環境心理学的研究 (1) －. *人間・環境学会誌*, 18, 9 (2) : 61, 2004.
- 16) Altman, I. and Low, S.M.: *Place attachment*. New York. Plenum Press. 1992.
- 17) Bowlby, J.: *Attachment and Loss. Vol.1, Attachment*. New York: Basic Books. 1969.
- 18) 園田美保：住区への愛着に関する文献研究. 九州大学心理学研究, 3 : 187-196, 2002.
- 19) 丸山昌一・浅井正昭・池見正剛・平田乃美・亀岡聖朗：近隣地域に関する愛着感評定尺度作成の試み. *日本心理学会第59回大会発表論文集* : 74, 1995.
- 20) 白石義郎：新入生の大学への適応 武内清 (編) *キャンパスライフの今*. 玉川大学出版会, 2003.
- 21) 古川雅文・藤原武弘・井上弥・石井眞治・福田廣：環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達的研究. *心理学研究*, 53 (6) : 330-336, 1983.
- 22) 丹羽知美：青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程. *パーソナリティ研究*, 13 (2) : 156-169, 2005.
- 23) 加藤隆勝・石川透・田中祐次・落合良行・高木秀明・堀啓造：現代青少年の人間関係と適応感 (1) －研究の目的・方法－. *日本教育心理学会第23回総会発表論文集* : 566-567, 1981.

A Psychological Study on Environmental Transition to a New University : Effects of Environmental Cognition and Attachment on Adjusting to the University

Seiro Kameoka

Abstract

The present study examined relationships between environmental cognition of student's university life and their attachment to the university. An environmental cognition scale on student university life and an attachment scale were administered to 380 new-comer students. A factor analysis, principal factor extraction with orthogonal rotation was performed on the data of the cognitive scale and the factors extracted were then analyzed by a multiple regression analysis. Results of the factor analysis extracted five factors as the cognitive dimensions of the student university life : (1)"practice", (2)"freedom", (3)"subjectivity", (4)"anxiety", and (5)"friendship" factors. In addition, results of the multiple regression analysis showed significant relationships between student's attachment to the university (individual variables) and all factors in cognition (dependent variables) except "anxiety" factor. Those results suggest that new-comer students' attachment to their university influence and relate to the adjustment to the environment as well as their overall quality of university life.

Keywords: University environment, Attachment, Environmental transition, Adjustment